

武蔵野日曜集会

世を愛する

――ヨハネ伝第3章16～21節――

1994年4月24日

小池辰雄

棄身の愛 霊生を与える 審きとは自分で自分を審いている キリストという真相を現する
霊体をたまわる キリストは真理そのもの

【ヨハネ3・16～21】

16 それ神はその独子^{ひとりご}を賜^{たま}うほどに世を愛し給えり、すべて彼を信ずる者の亡びずして永遠の生命を得んためなり。17 神その子を世に遣わしたまえるは、世を審^{さだ}かん為にあらず、彼によりて世の救われん為なり。18 彼を信ずる者は審かれず、信ぜぬ者は既に審かれたり。神の独子の名を信ぜざりし故なり。19 その審判^{さはん}は是なり。光、世にきたりしに、人その行為^{おこない}の悪しきによりて、光よりも暗黒^{くら}を愛したり。20 すべて悪を行う者は光をにくみて光に来らず、その行為の責められざらん為なり。21 真^{まこと}をおこなう者は光にきたる、その行為の神によりて行いたるこの顕れん為なり。

●棄身の愛

「3・16」にはこのヨハネ伝3・16ともう一つ有名なヨハネ第一書の3・16がある。

「16主は我らの為に生命を捨てたまえり、之によりて愛ということを知りたり、

我等もまた兄弟のために生命を捨つべきなり。」(ヨハネ一3・16)

これも決して忘れないようにしてください。

今日は『世を愛する』という題です。

16 それ神はその独子^{ひとりご}を賜^{たま}うほどに世を愛し給えり、

「その独子^{ひとりご}」とはもちろんキリストのことです。十字架の贖罪と永遠の生命、復活の生命、

それが「独子を賜う」内容です。罪の贖いと永遠の生命、これがキリストが「世を愛した」

その内容です。相手が愛するに値するとか値しないとか、そんなことは問題でない。「世」

とは「罪の世」ということです。聖書でただ「世」というときは大体、罪の世のことをいう。

神に背いている者を愛する、神を忘れている者を愛する。だから、この愛は普通の愛では

ない。世の中の善い者を愛するとか悪い者を憎むとか、そんなことではない。世というの

は相対的にいつて神から離れていることを「世」という。



だから、「世を愛する」ということは棄身の愛なんです。愛の内容は己を棄てることです。「棄身」というのは素晴らしい言葉だ。何でも棄身でかかったら、できないことはない。「全力を尽くす」という言葉よりも「棄身」という言葉の方が強い。棄身ということは無我の境地です。我が無い。無というのは真理の根底です。キリストは無者なんです。己を何ものともしない、神一切である。だから、神はキリストの中に入ってきた。

普通の道徳の世界では己というものを立てて、大いに自己修養する。

「汝自身たれ」

なんてね。真理というものは矛盾の両極をもっている。ひと一人の存在は全世界とも代えることのできない価値をもっている。九十九匹の羊をそっちのけにして、ただ一匹の羊を谷底に下りて行って棄身の愛で助けてくれる。これが神の愛、キリストの愛です。キリストは実際、棄身なんだ。十字架の上に自分を棄てたんだから。愛の一番深い内容は棄身ということですよ。相手を救うためには棄身でいく。

本当の伝道もそうだ。お説教なんかしている伝道はひとつも伝道ではない。聖書の研究をしてお説教しているようなのは、冗談じゃない。それよりか素晴らしい文学でも読んだ方がいい。ユゴーの『レ・ミゼラブル』とか、トルストイの『復活』とか、ゲーテの『ファウスト』とか。文学というものはお説教ではない。素晴らしい優秀な文学は一番身になる、味がある。いわゆる道徳、いわゆる宗教というのは味がない。臭みがある。道徳臭かったり、宗教臭かったりする。本当の文学は臭みがない。

棄身だと、相手の中に自分を溶け込ましてしまう。そしてそれを本当の世界に入れていく。棄身の内容はキリストだから。キリストが入ってくるから凄いことになる。キリストの中に棄身するんです。どこに棄身するかというと、キリストの中に自分を棄てる。そうすると今度は、キリストが働きたもう、力を与えたもう。光を与え、生命を与えたもう。だから、棄身というのは素晴らしいことだ。

● 霊生を与える

「何も要らん」という人は宇宙をもつてしまう。昔から偉大な坊さんの境地は大体そういうようなところだ。アッシジのフランチェスコだの、ああいう伝記を読んでいると、全く参ってしまふね。イギリスのクロムウェルという人もなかなか大変な人だ。カーライルが『クロムウェル伝』を書いた。あれは素晴らしい。若い人は第一級のものを読まなければダメですよ。いい加減なものを読んだり、二流以下は要らん。第一流のものだけでたくさんです。

16 ひとりのそれ神はその独子を賜うほどに世を愛し給えり、すべて彼を信ずる者の亡

びずして永遠の生命を得んためなり。

背いたり忘れたり無関心であつたり、そういう世というものに神さまはキリストを与えた。それは「亡びずして永遠の生命をやるため」であつた。



「信ずる」という言葉は私はあまり好きではない。

「分からないけれども信じておこう」

なんてダメです。身体で受けとる「体受」が一番いい。全存在で受けとる。信ずるでなくて、我々はキリストを体受します。全存在で受けとります。キリストの中に棄身をします、そうすると受けとる。

この「棄身」というのを今日は、皆さんはよく身体の中に入れてしまってください。キリストの中に棄身すればいい。「愛する」なんて言う必要はない。

「私はキリストを愛していますか、愛してませんか」

なんて考えないで、

「キリストに棄身です」

と言う。棄身が本当の愛なんだ。讃美歌の中にも棄身なんていう言葉はないね。

これは私は今考えたのではない。何も考えないでこうやってここで読んでいると、棄身なんていう言葉がでてくる。壇上に立つまで棄身なんてことは何も考えなかった。とにかく、空っぽでいると、神さまはその時その時にひらめきをくださるわけです。一生懸命で聖書研究し参考書を読んでお説教するのはご苦労さんはなしだ。聞いている者はくたびれて眠くなったりする。

¹⁶ **それ神はその独子^{ひとりご}を賜^{たま}うほどに世を愛し給えり、**

救わんためである、審かんためではないと。

すべて彼を信ずる者の亡びずして永遠の生命を得んためなり。

「彼を受けとる者は亡びないで永遠の生命を与えられるためである」

と、そういうように書かないとダメだよ、ヨハネは。「得んためなり」ではなく、「与えられるため」だ。聖書の文句すら、その奥の響きを読めば、聖書の文句にもこだわらない。

「小池先生は勝手な読みかたをする」

なんて、勝手な読みかたをしているのではない。聖霊の導きでその奥を読んでいる。

神さまは棄身だ、独子を賜うのだから。しかも、相手はしょうがないものだ。棄身だから、相手を救いあげてしまう。十字架の棄身だから。十字架の棄身で、今度は復活して――復活という言葉は余り好きではない、本来の霊生が現れて――その霊生をみなに与える。霊的生命を与える。それが永遠の生命です。「永遠の生命」というよりも「霊生」と言った方がいいね。

● **審きとは自分で自分を審いている**

「信ずる、信ずる」と書いてあるね、嫌だね、この「信ずる」は。

「キリストを受けとるものは」

ということですよ。どうも「信ずる」という言葉は観念的になって、観念信仰になってしまう。



聖書は改訳しなければダメだね。ギリシア語やヘブライ語で何と言おうと、その奥の本当の内容をズバリと表すような訳しかたでいいんだ。翻訳は創造なんです、創作なんです。霊的創作をしていい。本当に聖書を読む人はそういう読みかたをする。キリストやパウロが旧約を読むときに、旧約聖書のその現実をもう一つ乗り越えた読みかたをしている。聖霊の光で読んでいる。我々も聖霊の光で旧約を読む。だから、ユダヤ教を乗り越えている。旧約を本当に生かすんです、旧約のままではダメだから。

その点で旧約の中で素晴らしいのは預言書です。特にイザヤ書は凄い。イザヤは聖霊の力で書いている。イザヤ書を時々読んでくださいよ。全イザヤ書66章は聖書66巻の縮刷みたいなものだ。エレミヤという預言者は非常に人間性の深い人です。エレミヤ記を読むと心が慰められる。イザヤ書は霊の世界、エレミヤは心の世界。ホセアは棄身の愛の世界。ホセア書というのは小さな預言書だけれども、凄い。旧約ではイザヤ、エレミヤ、ホセアが大事です。

18 彼を信ずる者は審かれず、信ぜぬ者は既に審かれたり。神の独子の名を信ぜざりし故なり。

「彼を受けとる者は審かれない、受けとらない者は既に審かれている」

ということ。「信ずる」とは「全存在で受けとる」ことです。皆さんは、「信ずる」なんて書いてあつたら、そういうように読んでくださいよ。どうも観念的だね、この「信ずる」という言葉は。

「まあ、分からないけれども、信じておこう」

なんて、冗談じゃないよ。

19 その審判は是なり。光、世にきたりしに、人その行為の悪しきによりて、光よりも暗黒を愛したり。

そのとおり。それがもう自分で審かれている。審きとは自分で審いている。神さまやキリストは何も審こうとは思ってない。自分で自分を審いている。ということは、受けとらないということ。真理を受けとらないのは自分でさばいている。神・キリストは何も審こうなんて思っていない、救おうとしている。

「とうとう審かれた」

ではない。自分で自分を審いている。

「光、世にきたりしに」とは、光というものを人格化しているわけです。「光であるところのキリストは」なんて余計な説明はしない。光がやってきたという。キリストは光であり、生命であり、愛であり、もちろん義でもある。

「義」というのは義しいということではない。「義」とは「羊の我」と書く。自分が羊に、神さまの羊羊になっっている。羊の我、「我は羊なり」ということ。神さまとの関係が、自分が羊で神さまが牧者である、その関係が「義」なんです。それが本当の義しい関係です。



「人その行為の悪しきによりて、光よりも暗黒を愛したり」

夜行動物だね、この「暗黒を愛する」のは。フクロウやミミズくみたいに。

「⁸我が^{あたしひと}敵人よ我につきて喜ぶなかれ、我^{わが}仆るれば興^{おき}あがる。幽暗^{くらみ}に居ればエホバ我の光となりたもう。」(ミカ7:8)

闇の中でもエホバが光だから一向差し支えない、歩けるんだと。世の中がどんなに闇の世の中であつても、偽りの世の中であつても、キリストが光だから、真だから一向差し支えないというのと同じことです。

「自分が倒れるのは起き上がるためだ」

とは、ブラウニングの詩(『ラビ・ベン・エズラ』)の中にある言葉です。ブラウニングはこれから思いついたのかな。

「¹¹暗^{くらみ}はかならず我をおおい、我をかこめる光は夜とならんと我いうとも、¹²汝のみまえには暗^{くらみ}ものをかくすことなく、夜もひるのごとくに輝けり。なじにはくらきも光もことなることなし。」(詩篇139・11～12)

これも素晴らしい言葉ですね。聖書は聖書をもつて証していくのが一番いい。

●キリストという真相を現する

「それ神はその独子^{ひとりご}を賜うほどに世を愛し給えり、すべて彼を受けとる者の亡びずして永遠の生命を与えられるためである。神その子を世に遣わしたまえは、世を審^{さば}く為でなくて、彼によりて世を救わん為である。彼を受けとる者は審かれず、受けとらない者は既に審かれている。自分で自分を審いている。神の独子の名を受けとらない故である。」

聖書では「名」は実^{じつ}なんです。「キリストさま」と名を呼べば、それは実だから、そこに力がくる光がくる。サタンは「十字架」とか「キリスト」とかいう言葉が嫌いで逃げていく。ルターは、

「サタンがやってくる時には「キリスト!」とか「十字架!」とか叫んでサタンを退治した」

と、彼の伝記に書いてある。本当にキリストを体受していると、その人の身边には光がさしてくる。たまにそういう現象が起きる。私も昔そういうことが起きた。仁王さんみたいに炎が立つ。ゲートは死ぬ時に、

「メーア・リツヒト(もつと光を)」
と言ったという。

「窓のカーテンを開けてもつと光を」

という気持だったろう。本当にゲートという人は光を慕った人だ。彼は死ぬちよつと前に、「太陽とキリストの前には、私は無条件に跪^{ひざまず}く」



と言った。ナポレオンも最後には福音書を読んで

「福音書は本ではなかった、活物であつた」

と、彼は最後に福音書の前に参つてしまった。

20 すべて悪を行う者は光をにくみて光に來らず、その行為の責められざらん
為なり。21 真をおこなう者は光にきたる、その行為の神によりて行いたるこ
との顕れん為なり。

これは何か逆みたいな関係です。光にくると真が行える。光にくるとその光を身に浴びると、
真の行いが出てくる。光が元なんだ。「光行」だ——こんな言葉はないけれども——光によ
つて行いが出てくる。「真をおこなう者は光にきたる」というのは説明的な言葉だ。ダメだね。
「光にきたる者こそ真を行う」
ということ。

「その行為の神によりて行いたることの顕れん為なり」

の「為なり」とは、そんな目的ではない。

「行いは、神によつて行つたことが必然的に顕れます」

というわけで、「顕れん為なり」ではない。こういう言い方はおかしい。

「神において行つたことが顕れます」

であつて、「為なり」という目的みたいな言い方はおかしい。

皆さん、聖書の文句にも、訳も必ずしもよくないから、文字面にこだわらないで、その
文字の眼光紙背に徹する読みかたをしないとね。

「真を行う」というこの「真」という言葉は、「アレテイア」というギリシア語ですけども、
「真理を行ずる」ということです。「真理」という言葉がどうも観念的になつて困る、理とい
うのが。真相です。相といつてもこれは内的な相だけれども、外的なすがたではない。

「キリストという真相を現する」

これが「真理を行う」という言葉の本当の意味だ。キリストの内実です。とにかく、受け
とるときに、観念的な言葉でも、観念的に受けとらないで、もつと実質的に受けとるよう
な読みかたをしていかなないと、バカらしい。福音の世界は頭の世界ではないから。学問は
ずいぶん頭の世界があるけれども。理性で判断するのではなくて、霊で判断する。霊の世界、
心と霊が一つになっている世界です。

「霊で祈り、心で祈る」

とパウロがどこかで言っている。理屈ではない。霊だけでも困つてしまう、心だけでも困
つてしまう。「霊と心」は大事なことだ。「ガイストとヘルツ」「スピリットとハート」。その
両面が本当の人間の内的な姿です。その両面がなくてはいいかん。イザヤ書とエレミヤ記だ。



●霊体をたまわる

魂と肉体というわけだ。だから、我々がこの地上を去ると今度は、向こう側では霊体と
いうのがある。霊はただ裸でいない。霊体がある。パウロが言っているとおり、新しき体、
霊体をたまわる。コリント前書15章に、

「50 兄弟よ、われ之を言わん、血肉は神の国を嗣ぐこと能わず、朽つるものは
朽ちぬものを嗣ぐことなし。51 視よ、われ汝らに奥義を告げん、我らは悉と
く眠るにはあらず、52 終のラッパの鳴らん時みな忽ち瞬間に化せん。」

素晴らしいね、もうじき世の終りがくると思っていたわけだ。

ラッパ鳴りて死人は朽ちぬ者に甦えり、我らは化するなり。53 そは此の朽つ
る者は朽ちぬものを著、この死ぬる者は死なぬものを著るべければなり。

54 此の朽つるものは朽ちぬものを著、この死ぬる者は死なぬものを著るとき
『死は勝に吞まれたり』と録されたる言は成就すべし。』（コリント前15・50）

54

この「死なぬものを著る」とは霊体のことです。こういう人生観は普通はない。

私の兄貴（政美）は亡くなる少し前に、白衣のキリストが現れたのを見た。

「イエスさまがお迎えにいらつしやいました。お母さん、お先に失礼いたします、

お許してください」

と、そう言つて逝つてしまった。とにかく、人ごとでない。

私はどちらかというと、ヨハネの方に近いような人間だ。人によつて、パウロ的な人、ヨ
ハネ的な人、ペテロ的な人という、いろいろな型がある。大体、大きくいつてこの三つの
型だ。意志的な人間はパウロ的です、パウロは非常に意志の強い男だから。ペテロは中間だ。
ヨハネは情の、心の世界だ。よく、知情意という。人間の知識の世界と心の情の世界と意
志の世界。この三つはもちろん誰でももっています。その人によつてどこに重点があるかは、
人によつて違うわけだ。善い悪いではない。人の型だから仕方がない。その人その人の善
さというものは、神さまはそういうように造っているのだから。ドイツ人は大体において
この意の世界が強い。情はイタリヤかな。フランスはかなり知がある、イギリスもそうだ。
それは大体の気持です。

本当の宗教的判断というものは善悪の判断ではない。善悪の彼岸です。柳宗悦がそのこ
とを言っている。日本人が一番それが分かりやすい。自然が美しいから日本人は自然と
溶け合うところの気持をもっている。日本の自然は荒寥たる自然ではないから。

●キリストは真理そのもの

真理の主体、具体的な存在はキリストです。別な言葉でいうと、キリストは真理そのも
のです。真理を具現しているわけだ。なにしろ、福音書を読んでいると楽しい、相手はキ



リストだから。死人をも甦らせる人だから。大変なひとです、湖の上を渡ってきたり。次元が違う。イエスというひとは全く大変なひとだね。真似したってできない。真似しようと思ったらペテロは沈んでしまった。仕方がないから、キリストが彼を波の中から持ち上げてくださった。みな、あの通りだ。こんなキリストみたいなケタ違いな人はいない。お釈迦さんかなりケタが違うようだが、そのケタ違いの厚みはキリストの方がもちろん厚い。悟りの世界と体現の世界とは違う。とにかく、黙って祈ってキリストの中に自分を棄身しないね。そうしたら、異言が迸ったり、身体が震動したりしますよ。

どんなに身体の調子が悪くたって、薬なんでものはダメです。化学的な薬は逆に毒だよ。薬は要らん。私は高等学校時代に胃腸が弱くて、よく薬を飲んだが、

「ああ自分は薬にとらわれていたなあ」

と気がついて薬を全部棄てた。そうしたら元氣になって、大学に来たら全然病氣しない。

「我は医者なり」

と、キリストは本当の医者だ。霊的な、また肉体的な医者です。何しろ、死人を甦らせるようなひとだから。それはもう、いろいろな事態をとおして、自分で体験しなくてはならない。必ず体験、体現できます。

だから、福音は素晴らしいんだ。福音書というのはそういうわけで、何と言っても凄い。福音書はどこを読んでも。キリストが「何々せよ」とか「何々すべからず」と時々言っているけれども、それは決して単なる命令としてではない。

「私のところに来なさい、そうしたらできるぞ」

と、そういうように読んでいけばいい。キリストの言葉も言葉どおりでなくて、もう一つ奥を読んでもしょう。そういう非常に弾力性のある魂にならないとね。それが本当の無の世界なんです。我無き世界です。

ローマ書8章14節から17節までは素晴らしいところだ。やはり霊のことが書いてある。

「すべて神の御霊に導かるる者は、これ神の子なり。」(ロマ8・14)

使徒行伝14章9節のところも素晴らしい。

「この人パウロの語るを聴きいたるが、パウロ之に目をとめ、救わるべき信仰あるを見て、¹⁰ 大声に『なんじの足にて真直に起^{まっすぐ}て』と言いたれば、かれ躍り上りて歩めり。」(使徒14・9～10)

御霊に生きていると、こういう権威ある言葉が出てくる。そうしたら、歩き出した。

「キリストの直弟子はそうでしょうけれども、我々はどうも……」

なんて、そんなことを思う必要はない。同じことです。我々もみなキリストの直弟子です。皆さんお一人お一人は掛け替えのない存在です。そういう意味において、みな使命的存在ですから、大いに自信をもつてやってください。

